満席の盛況ぶりであった。会場の大きさの関係上、事前に抽選が行われたそうであるが、やむを得ないこととはいえ、惜しいことであった。結果論かもしれないが、十分広い会場を確保するため、参加費を徴収した方がよかったと思う。

福原京に焦点をあてたテーマの設定は、成功であった。わずか半年足らずの都ということもあって、藤原京や平城京などとは異なり、ほとんど地上にその痕跡を残さない福原京は、注目されることは少ない。地元の神戸市民でさえ、かつて都があったということを知らない人が多かったのではないだろうか。私自身も、恥ずかしながら遺跡として意識したことはなかった。

そこへ今回、清盛の妻・時子を題材とした「波のかたみ」など多くの著書がある永井路子氏が熱く語り、足利健亮氏は『玉葉』などの史料から推定した具体的な南北軸の都城計画図を示し、須藤宏氏は地中から、その痕跡を見いだせることを報告した。今回の講座の参加者は、神戸が古い歴史を持ち、多くの歴史遺産を持つ地域であることを再認識することができたはずである。

また、講演の前後の説明や、壁にはられたパネル展示などによって、一般市民に対し、史料ネットの活動の宣伝・啓発にも大いに役立った。多く集まった募金は、市民の理解が得られた結果であり、講演会の成果を示してくれた。

史料や文化遺産の保全を直接扱った講演会も重要であるが、専門家だけではなく、多くの市民にも史料ネットの活動を理解してもらえるよう、今後も地域の歴史など一般市民の関心を喚起するテーマを設定し、著名な文化人による講演会を開催することが必要であろう。

ボランティアの市民講座参加記③

樋口健太郎（神戸大学文学部大学院生）

私は今回の市民講座の準備段階から参加させていただいた。また講演中もスライド投影などの役を承っていたので、客観的なかたちでこの講座に参加したとはいいがたいが、私自身、史料ネットの活動に参加させて頂くのが、神戸大学文学研究科に進学した今春以来であり、これまでに感じたこと学んだことを踏まえた上で、今回の講座について若干の感想を述べてみたい。

今回講演されたのは、作家の永井路子氏、考古学の須藤宏氏、歴史地理学の足利健亮氏の三氏である。講演の後にはパネルディスカッションがあり、高橋昌明氏を司会に永井・須藤・足利の三氏ならびに奥村弘氏・大国正美氏が意見を述べられた。会場には老若男女を問わず、多くの市民の方々が集まった。今年のＮＨＫ大河ドラマ『毛利元就』の原作者でもある永井氏の知名度もあるのだろう。しかし、こうした阪神大震災復興に関わった、言わばかたいイメージのある市民講座にこれだけ多くの人々が参加され、また永井氏の講演のみでなく、最後のパネルディスカッションまで静聴されたことは、特記すべきと思う。

永井氏の講演にしても、題目は「平家物語の時代と神戸」というものであったのだが、内容は単に『平家物語』に描かれた平家の栄華物語や英雄譚だったのではない。あの震災を経て、果たしてこの地域の市民の共有するアイデンティティは何処に求められるべきか、ということが問われていたのだと思う。スライド上映やディスカッションで奥村弘氏が述べられていたことであるが、とくにこの地域の歴史が、戦前楠公として湊川神社に祀られた楠木正成をはじめとして皇国史観に強く結びついていることも理由の一つとして、神戸市は戦後、明治以降の外国に開けた都市としての、ある意味で清新な都市のイメージをつくりあげてきた。しかし、震災を経て、再び街を復興させてゆく、その街づくりの上で、もう一度自らの生活する地域を見つめ直してゆくとき、我々の地域がどのように地域として成り立ってきたのかを知り、行政ではなく地域に生きる人々が地域のことを真剣に考えはじめる段階が来たのだろう。今回の講座に、とくにこの地域に生活される多くの人々が参加されたのは、永井氏の講演をはじめとして、今回の講座が、こういった希求に充分応えうるものであったからと理解する。

被災地域における歴史を住民自身が見つめ直してゆくことは、この地域の歴史資料や文化財を守ることにも当然繋がるわけだが、史料ネットの活動自体についても、地域のこうした要望があるなら、まだすべきことが沢山ありそうである。加えて、今回は市民講座というかたちではあったが、より多くの地域の人々がこうした史料保護活動についてもっと認識し、単に研究者がリードするのではなく、地域住民による地域の活動とされる必要がある。